



Data

監督：森義隆
原作：大崎善生『聖の青春』（角川文庫刊／講談社文庫刊）
出演：松山ケンイチ／東出昌大／染谷将太／リリー・フランキー
／竹下景子／安田顕／鶴見辰吾／筒井道隆／柄本時生
／北見敏之

👁️👁️ みどころ

1988年度のNHK杯将棋トーナメントにおける歴代名人を撃破した羽生五段の優勝、1998年度のNHK杯における羽生 v s 村山の決勝戦の戦いぶり、そして2000年に読んだ大崎善生の原作『聖の青春』で流した涙を、私は今でもハッキリ覚えている。

そんな思い出は心の中だけにしまっておいた方が良いの？それとも映画で再びその感動を呼び起こすことができるの？そんな微妙な気持ちで本作を鑑賞！

東の天才・羽生 v s 西の怪童・村山の2人が見る高み（深み）を考えながら、勝負師・村山聖の生きざまをしっかりと味わいたい。



■□■棋士・村山聖！あの本が映画になるとは！■□■

中学生になりたての頃、将棋の「棋士になる！」と意気込んでいた私は、父親のツテによって松山市内に住むアマ四段の大人と対局する機会を得た。しかし、当然ながら「二枚落ち」でも見事に敗北したことによって単純に将棋の世界の厳しさを知り、その夢を諦めてしまった。これは要するに、私はその程度ののめり込み方しかしていなかったということだ。しかし、1969年に広島で生まれ、5歳でネフローゼ症候群と診断され、入院生活の中で将棋を覚え、7歳でアマ三段の大人を負かした村山聖少年は私のように軟弱ではなく、その後10歳でアマ四段の認定を受けた後、14歳で奨励会に入会し、17歳の1986年にプロ四段になった。

司法修習生時代には将棋大会に出場するなど、その後も一貫して将棋が大好きだった私

は、弁護士になってからも毎週日曜日に放映される『NHK杯テレビ将棋トーナメント』をいつも録画して観ていた。そんな私でもデビューした頃の棋士・村山聖はよく知らなかったが、はじめて彼を知った時、何よりも異様に思ったのはそのでっぷりと太った体型。これが食べ過ぎによる肥満ではなく、ネフローゼ症候群からくるむくみの症状だということは何らかの報道で知った頃、彼は1995年に八段となっていた。そして対谷川戦10戦目のA級復帰戦で初勝利「名人が見えてきた」と確信する地位まで伸びていた。

私が大崎善生のノンフィクション『聖の青春』を読んだのは、同書が出版された直後の2000年。その人物像の面白さ、師匠である森信雄七段との出会いの面白さ、そして何よりも私が中・高時代に愛読していた『将棋世界』の編集長であった大崎善生氏が書いた文章の面白さに魅かれて一気に読み上げたが、後半からクライマックスにかけては涙が止まらなかったことをよく覚えている。そんな原作が松山ケンイチの主演で映画化！その話をずっと以前に聞き、体重を20kg以上増やして村山聖役に挑む松山ケンイチの姿をニュースやチラシで見た時、大いに興味を覚えたが、ついにその映画が公開！あの本が映画化されるとは！まずはそんな驚きが大きかったが、とにかく何が何でもまず鑑賞しなければ・・・。そんな思いで公開2日目に劇場に駆けつけることに。

■東の天才・羽生vs西の怪童・村山！■

私はNHK杯での村山のデビューぶりは見ていないが、1982年に第7回小学生将棋名人戦で優勝し、1985年にプロ四段となり史上3人目の中学生棋士となった羽生善治は1986年度に40勝14敗という驚異的な成績で将棋大賞の新人賞と勝率一位賞を受賞。そんな彼の第38回のNHK杯（1988年度）での戦いぶりを、私はよく覚えている。対局相手を下から睨めつけるように見上げる俗にいう「羽生にらみ」と呼ばれる姿は絶対に忘れることのできない鮮烈なものだった。このNHK杯でのデビュー戦で、羽生は大山康晴（3回戦）、加藤一二三（4回戦＝準々決勝）、谷川浩司（準決勝）、中原誠（決勝）という当時現役の名人経験者4人をすべて破るという何ともしごい戦いぶりを見せたが、私はそれを毎週のように驚きの目で見ていた。

1969年6月15日生まれの村山は、1970年9月27日生まれの羽生と1学年違うだけの同世代。この2人が後に「東の天才・羽生vs西の怪童・村山」と呼ばれようとは、将棋の神様も予想しなかったはずだ。1998年度、村山29歳の時の第47回NHK杯決勝戦は、羽生vs村山。当時私はこれをテレビで食い入るように見ていたが、終盤これは村山の必勝！誰が見てもハッキリわかるそんな局面で、何と村山は大チョンボ（大落手）。これにはすべての視聴者が驚かされたが、この時村山は前年に手術を受けた膀胱癌が再発していたことを当時の私は知る由もなかった。

このNHK杯での勝負が羽生との最後の対局となったが、29歳で死亡した村山は対羽生戦6勝7敗の記録を残しているからすごい。本作終盤には勝負を終えた後食堂で2人だ

けで語り合う静かだが本作のハイライトとなるシーンが登場するので、それに注目！天才と怪童の2人にしか見えない高み（深み）を究めようとする2人の若者の、含蓄の多いセリフのやりとりに注目したい。

■師匠と弟子、そして荒崎との人間関係に注目！■

棋士・村山聖を育てた師匠は、森信雄七段（リリー・フランキー）。自ら棋士としては「三流」と述べ、七段の昇段祝いのパーティーでは弟子の村山からもそのように称された師匠・森信雄は、しかし弟子を人間として扱い、成長させることにかけては超一流だった。そんな森信雄役を本作ではリリー・フランキーがいつもの映画で見せるアクをすっかり取り払い、ホントにいい人役を演じている。こんな純粹（単純）で裏表のない人間をリリー・フランキーが演じるのは多分本作だけだろう。

それに対して、村山の弟子でありながら奨励会の厳しい年齢制限のルールの中で四段に昇段できず、プロ棋士への道を断たれてしまう江川貢（染谷将太）や、村山の良き理解者となるプロ棋士仲間の荒崎学（柄本時生）らと村山との人間関係を描く本作では、勝負師の世界特有の厳しさに注目！「棋士への夢が断たれても、第二の人生があるさ」「腐らずにその道を歩もうよ」と励ますのが普通の世界だが、棋士という勝負師の世界では・・・？ また「羽生に勝つことは20勝の価値があるが、荒崎さんに勝つても一勝でしかないから」と言われれば誰でもハラが立つものだが、飲み会の席で面と向かってそんなことを言う村山に対して荒崎は・・・？

難病に苦しむ息子に対する母親の村山トミコ（竹下景子）や父親の村山伸一（北見敏之）の思いは親として当然のものだが、本作では羽生 v s 村山という通常の間人には到底理解できない2人だけの世界のみならず、村山と師匠の森信雄、弟子の江川貢、同僚棋士の荒崎学との人間関係を見る、勝負の世界に生きる人物像をしっかりと確認したい。

■プロ棋士の公式戦とは？タイトル戦の重みとは？■

プロ野球はもとより、ゴルフでもテニスでも大相撲でも今やテレビ放映でいくらでも楽しむことができる。それと同じように、囲碁でも将棋でもタイトル戦ともなるとその対局ぶりがテレビで放映されることもあるから、それを楽しむことができるが、スポーツの放映に比べればまだまだ囲碁、将棋の人気は低い。また、野球でもテニスでもゴルフでも大相撲でも入場券さえ購入すればナマでその試合を見ることができるが、狭い部屋の中で記録係を除いて2人だけが対局するタイトル戦をナマで見ることが、普通の人にはできないのが当然だ。

しかし、私は事務所のすぐ近くにある料亭「芝苑」で開催された朝日プロトーナメント戦で1度だけナマのタイトル戦対局を見学したし、大広間での検討会には2度参加したことがある。検討会は多くのプロ棋士や報道関係者が将棋盤をたくさん並べてあれこれ議論

しているから見ていて面白いが、対局室でのピンと張りつめた雰囲気は一度経験すればそれで十分。その空気の重みを数十分以上共有することは素人にはとてもできないものだった。そんな貴重な体験をした私には、本作で村山役を演じた松山ケンイチと羽生役を演じた東出昌大との対局シーンはホントにすばらしいものだと思えた。

棋士の対局姿はNHK杯トーナメント戦を見ていればよくわかるが、ひときわユニークだったのが加藤一二三九段。彼のたてる駒音の激しさは特筆モノだが、昨今は彼のようなクセのある棋士は少なくなり、表面上はお行儀の良い棋士が多くなった。それでも、終盤になり一分将棋となって秒読みの連続の中で最良の一手をひねり出さなければならなくなると、否応なくその棋士の本性が態度やしぐさに現れてくるから勝負の世界は面白い。NHK杯に見る囲碁の勝負は「殺し合い」になると面白いが、ヨセ勝負になると全然面白くない。しかし、将棋は終盤のねじり合いとそこに見る棋士の姿が実に面白い。

森義隆監督は大崎善生の原作を映画化するにあたって「伝記モノ」にはせず、村山聖の最後の4年間に見る勝負師としての生きざまに焦点を当てているが、そのハイライトになるのは何といっても静かだが激しい闘志がぶつかり合う対局姿だ。NHK杯トーナメントのように1つ1つの駒の動かし方の解説はもちろんだが、本作ではまさに村山聖になり切った松山ケンイチと羽生善治になり切った東出昌大の鬼気迫る対局姿に注目！

■□■マージャン、競馬、酒、少女マンガvsチェス■□■

本作には、村山が大阪の福島区にある関西将棋会館の近くにある本屋の店員の女性にほのかな恋心を抱くシーンが2度登場する。この本屋は少女マンガが大好きな村山が通っていた店だが、中学校を卒業しただけの村山には器用な言葉で女の子に声をかける能力はなかったらしい。村山と羽生が2人で語り合う本作のハイライトシーンで村山は珍しく饒舌に、羽生に対して「僕には2つの夢があるんです」と語りかけていた。その1つは予想通りだが、もう1つは意外にも普通の結婚をすることらしい。しかし、末期の膀胱癌の手術を受けることを決心した時の「僕も1度は女を抱きたかった」という言葉を聞くと、何と彼は・・・？

将棋の棋士は勝負ゴトが大好きだから、囲碁やマージャンそしてチェスが好きな人が多い。また競馬ファンも多いらしい。村山の師匠の森信雄七段自身が大酒飲みで多趣味な人だったこともあって、村山もネフローゼ症候群でありながら、酒は飲むわ、マージャン、競馬はするわ、というかなり荒れた(?)生活を続けていたようだが、それもすべて勝負師の性(さが)・・・?もともと、少女マンガが大好きというのは超異例だが、これが怪童・村山の本性の一面を如実に示している。そんな子供のような優しいところがあったからこそ、本音で吐く言葉はハチャメチャで人を傷つけることがあっても、荒崎をはじめ村山の周りの人たちは村山を愛していたわけだ。

村山の趣味である酒、マージャン、競馬、少女マンガに羽生は全く関心なし。逆に、羽

生の趣味であるチェス（これは趣味の領域をはるかに通り越してプロ並み）に村山は全く関心なし。2人が語り合うシーンでは、そんな風に趣味でも全く正反対で何の接点もなさそうな2人の対比が面白い。しかし、コト将棋の真剣勝負になると、この2人は・・・？

■□■奇跡の復活！しかし将棋の神様は・・・？■□■

2015年9月に直腸ガンの手術を受けた私は半年間（仮の）人工肛門（ストーマ）生活を余儀なくされ、「パウチ」と呼ばれる排便用のビニール袋を取り付けざるをえないことになったが、これはつらいものだった。永久の人工肛門になれば身体障害者4級だから、その障害の重さは相当なものだ。膀胱癌の手術を終えて勝負の世界に復帰した村山は「とうとうキンタマを取ってしようた」と明るくしゃべっていたが、勝負の合間に少しだけ見せてくれるパウチ姿は大便と小便の違いこそあれ、それを体験した私には何とも重々しいシーンだった。ちなみに、俳優の渡哲也は直腸ガンで（永久）人工肛門となりずっとパウチをつけているそうだが、それでも長い間第一線で活躍しているから立派なもの。それに対して村山の場合は、せっかく膀胱癌の手術に成功し、棋士として奇跡のA級復活をしたにもかかわらず、若いこともあって何とそのガンが再発！私がワクワクしながら観た1998年度の第47回NHK杯テレビ将棋トーナメントでの羽生との決勝戦時の村山は、そんな健康状態にあったわけだ。羽織袴の正装をした村山は、師匠の森信雄七段が述べた「お稚児さんのようだ」との表現がピッタリだが、その体の中がそれほどぐちゃぐちゃに壊されていたとは！将棋の神様はどうして、羽生との最後の勝負となったあのNHK杯の決勝戦を村山に勝たせ、通算成績も7勝7敗1不戦敗とキリのいい(?)ところにしてくれなかったのだろうか。

それはともかく、本作では臨終のシーンにも注目！太閤秀吉は臨終の際「露とおち 露と消えにし わが身かな 難波のことも 夢のまた夢」と辞世の句を詠んだが、意識混濁状態の村山の口からうわごとのように出てきたのは「8六歩、同歩、8五歩・・・」「2七銀」。大阪が産んだ稀代の勝負師・坂田三吉は、念願の関根金次郎十三世名人と対戦した時の「銀が泣いている」の名セリフが有名だが、ネフローゼ症候群と膀胱癌に苦しみながら将棋の勝負に命を捧げた村山にはこの辞世の言葉がまさにピッタリだ。大崎善生の原作を読んだ時はこのラストシーンで涙がポロポロ流れたが、それは映画でも・・・。

■□■舞台はイマイチただだけに・・・■□■

ちなみに、大崎善生『聖の青春』をいずみ凜が脚色し、菊地准が演出した劇団コーロの舞台『聖の青春』（03年）は、全1幕1時間40分の構成でまずまずの出来だった。しかし私が不満だったのは、①谷川、羽生とのライバル対決の姿が突っ込んで描かれていないこと、②本当に涙を誘う感動的な聖の「死にザマ」が描かれていないことの2点だった（『シネマルーム3』381頁参照）。大阪が生んだ棋士・坂田三吉を主人公にした北条秀司の戯

曲『王将』は、昭和36年に村田英雄が歌った『王将』によって全国的に認知されたが、そこでは坂田三吉と関根金次郎第十三世名人との死闘がハイライトとされていた。それとの対比でも、舞台『聖の青春』に村山v s 羽生、村山v s 谷川の闘いが描かれていないことが、私には最大の不満だった。

しかし本作はそんな舞台と正反対に、まさに村山v s 羽生の対決をストーリーの軸に据えたうえ、最後には誰もが涙を流さずにいられない感動的な聖の死にザマを描いている。つまり2003年に上映された舞台の『聖の青春』がイマイチただだけに、私には2016年の今、映画として公開された本作の感動性がより強まったわけだ。

将棋の好きな人や勝負の世界が好きな人には、本作は必見！そうでない人も、本作を見れば勝負に人生をかけた男の生きザマと死にザマの壮絶さに感動するはずだ。

2016（平成28）年11月22日記